自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2005 年 10 月
No.39

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会
Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

2005 年 10 月までの報告と予定

- ■　5月　HIV･ピア学校教育ワークショップ
- ■　6月　宇都宮市、瑞浪市、東御市より移動図書館車受領
- ■　7月　TAAA 活動報告会とワークショップ
- ■　8月　鎌ヶ谷市より移動図書館車受領
- ■　8月　南アを訪問、南ア教育大臣と会議
- ■　8月　本13662冊と算数セットなどを南アへ送る
- ■　9月　「ほっとけない世界のまずしさ」賛同団体になる
- ■　10月　泉南市より移動図書館受領
- ■　10月～11月　南ア KZN 州へ車4台送付予定

目次

南ア帰国報告会の講演より（平林薫）・・・・・・・・・・2
良い本が集まりました（河合塾）・・・・・・・・・・・・5
南アフリカ訪問記（近藤信幸）・・・・・・・・・・・・・6
南ア訪問日記（野田千香子）・・・・・・・・・・・・・・8
移動図書館車、輸出入の変遷（浅見克則）・・・・・・・9
「ホワイトバンドデー」に参加して（久我祐子）・・・１０
主な活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
寄付・会費・本などを下さった方々・・・・・・・・・・１２

皆の前で本を読む子どもと見守る先生　KZN 州

南ア帰国報告会の講演より　　２００５年7月３１日

～経済格差の拡大の中で求められるもの～

移動図書館とＨＩＶピア教育プロジェクトを通じて

平林 薫（TAAA 南ア事務局）

民主化から 11 年、南アフリカは大きく変わりましたが、私たちが活動を行なっている有色人居住地域の人々の生活はほとんどと言っていいほど変わっていません。白人主導の経済は現状維持、一部の黒人エリートを作り出しただけ、という、弱者切り捨てにも見える政策に、一般人は“結局自分達は忘れ去られてしまっている”という気持ちを抱き始めています。南アでは“家を作りましょう”“仕事を与えましょう”“電気水道をひきましょう”といった具体的、直接的な公約に期待を膨らませていた人々の失望感は大きいと言えます。

一握りの黒人層の子供達は最高レベルの学校で学んでおり、彼らが次の世代のリーダーとして活躍することになるでしょう。この 11 年間にやらなければならなかったことは、一握りのエリートを作り出すことではなく、有色人居住地域や地方の学校を急いで整備し、そこに学ぶ何十万、何百万の子供達に均等な教育の機会を与えることだったのです。現在、南ア各地で賃上げ要求のデモ、住宅、水道、道路などの整備を求めるデモ、HIV 抗ウィルス薬の配布をめぐるデモなど、人々が声をあげ始めています。

求められる移動図書館と本

このように、この 11 年間教育制度の改善は思うように進みませんでした。地方の学校のほとんどは、アパルトヘイト当時そのままの設備で、どんどん老朽化していくばかりです。一番大切なソフトの面、本が足りません。このような状況の中、ＴＡＡＡからの本と移動図書館車が現地の学校でどれだけ有効に利用されているかご想像いただけると思います。

移動図書館のシステム作り

現在、南ア全土で 11 台が稼動しており、3 つの州の教育省、NGO、またコミュニティーが協力して活動を行なっているところもあります。プロジェクトを長期的に安定して行なうという観点から見ると、州教育省をベースに運行するのが一番の方法と思われます。移動図書館車を図書教育プログラムの中に置き、省として予算をつけ、ドライバーや司書、担当スタッフを雇用し、様々なコストをカバーします。また、貸し出し図書についても、教育省のカリキュラムに則った本を選び準備することができます。南アフリカの公立校は一月開始の４学期制で、移動図書館車は学期ごとに貸し出しと返却の２回ずつ各校を訪問しています。それぞれ受け入れ先の状況にもよりますが、現在の一番の課題は、できるだけ多くの学校を訪問できるよう、本の貸し出しと返却の効果的なシス

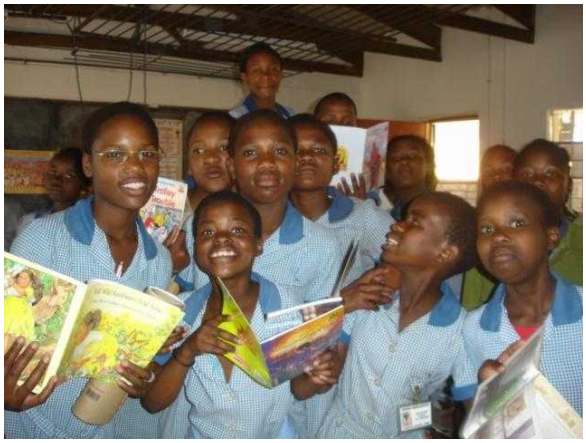
テム作り、コンピューター化をすることです。ニーズに応えて十分な蔵書を準備することも重要です。どちらも十分な予算がつかないとなかなか進みません。TAAA から送られる本は、移動図書館車にも載せられ、各校に貸し出しされています。遠隔地では移動図書館車一台で、15 校前後しか巡回できませんが、そこに学ぶ約 5000 人の生徒達が本にアクセスできることになります。州や国全体から見れば点のような支援ですが、その中の数人でも、本を読むことで学ぶ楽しさを知り、教師になって次の世代に伝えていったり、コミュニティーのリーダーになったりして欲しいと願いながら、私たちは小さな種を蒔いているのです。

意欲ある先生たちの力

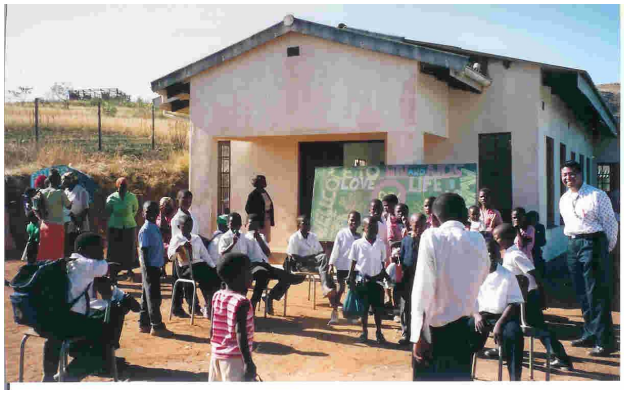
様々な活動を通して、州内のたくさんの学校を訪問していますが、強く感じるのはプロジェクトは先生方の意欲にかかっているということです。活動をしている間に、プロジェクトをより効果的なものにするための提案、改善をしていくのです。JICA の HIV／AIDS ピア教育プロジェクトにおいては、参加校の GIJIMANI 高校からコミュニティーも含めたエイズデーのイベントを開催したいという要請がありました。学校内だけでなく、コミュニティーの人々へも HIV／AIDS に関する正しい知識と情報を伝えることができます。この提案が受け入れられ、他の参加校でもイベントの開催が始まりました。SISEBENZILE 高校では、イベントで発表する劇の脚本、キャスティング、衣装などすべて生徒達で作り上げました。ズールー語で進められていましたが、プロの役者のような生徒もおり、その表現力だけでも十分内容が伝わってくるものでした。学校内の生徒達だけでなく、識字率の低い地方のコミュニティーの人々へは、劇や歌を通してメッセージを伝えるのが一番効果的な方法であることを改めて理解することができました。

貧富の差の拡大、援助は人から人へ

現在、アフリカの国々は様々な問題を抱えています。貧しく、十分に食べることすらできない人々がたくさんいます。アフリカには国としては豊かな石油や鉱物資源の産出



マンドシ小学校　移動図書館の本



エイズデーのイベント　右端：武藤

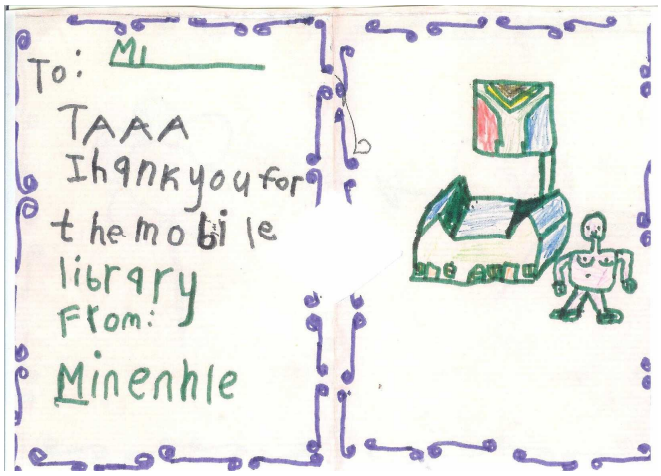
国もありますし、南アのように先進国と発展途上国が同居しているような国もあります。経済が偏っており、富の分配ができておらず、貧富の差はますます大きくなるばかりです。これは元の宗主国の利害など複雑な問題が絡んでおり、一朝一夕に解決できるものではないでしょう。支援は人から人へ。これが基本ではないでしょうか。政府関係者や有識者達が集まって、ホテルや会議場で話し合いをするのは、大きな方向性やイデオロギーの確認であって、彼らが直接支援を行なうことはなかなかできません。彼らの決定を待ったり、動きを期待したりしても、遅くなるばかりです。ネットワークをフルに活用して、自分たちでできることをはじめていくしかありません。

子供たちの創造性の開花

支援をする中で、彼らには自分たちの才能に自信を持つこと、お金や物を持つことだけが成功ではない、ということを伝えていきたいと思っています。移動図書館車プロジェクトに参加している学校では、借りた本のストーリーを子供達が劇にしてみせてくれます。私はいつもそのクリエイティビティー(創造性)に感銘し、その歌声に感動させられます。私たちが送った本がどこか小さな村の子供達の手に届き、その本に影響を受け、10 年後に自身で素晴らしい本を書き上げたり、それを演じる俳優になったり、次の世代に伝えようと教師になったり、そんな姿が見られたら、私たちの活動も成功したと言えるでしょう。

子どもたちからのお礼のカード

先日、イナンダ地区の移動図書館車プロジェクト参加校であるマンドシ小学校の生徒たちからお礼状をもらったのですが、その中に“本を必要としている他の学校や生徒達にもぜひサポートしてあげてください”というメッセージがありました。私たちが彼らを支援している姿を見て、彼らも自分ができることを次の人にしてあげる気持ちを学んで欲しいと願っています。また、センゾクーシェ小学校では、移動図書館から借りる本のおかげで、生徒達が本を読めるようになったとか、こんなにいろいろなことを学ぶことができた、といって披露してくれました。



マンドシ小学校の生徒たちが書いてくれたお礼のカードです。

「良い本が集まりました！」　　河合塾　宮崎敦子

2005 年度の河合塾での南アフリカ教科書寄贈支援の取り組みについてご報告致します。今回は 2001 年から取り組んできて３回目の実施となりました。これまで同様全国の高等学校、予備校、河合塾生や保護者の方、塾職員に呼びかけを行い、たくさんの本を集めることができました。

ただし、これまでとは違い回収期間が短かくなり、回収回数も２回から１回に減ったこと、収集する本を教科書中心ではなく図書館車で使えるような書籍にシフトしていったことで集まった本の冊数はこれまでに比べてぐっと少量になり具体的状況は以下の通りです。

（１）ご協力校数

高等学校　３９校　　予備校２校　　個人１名　　河合塾２５校舎・部門

（２）寄贈冊数　約７０００冊

（３）実施スケジュール　２～３月　高校・予備校・河合塾校舎へ呼びかけ

５月　書籍回収（西濃運輸様協力）

７月　箱詰め作業（塾生１名、職員７名）

８月　横浜港よりダーバンへ出荷（塾生２名、職員多数）

図書館の蔵書だった英語の書籍を１９箱も送ってくださった高校もあり、こちらが意図したとおりの本が集まったことに、各協力校の意識の高さを感じました。

今回、河合塾の担当者は私も含め４名でした。他の者の感想も掲載させて頂きます。

今回初めて参加しましたが、私のほんの少しの手伝いが南アフリカの子供達の笑顔に変わると思うと、大変やりがいを感じられました。（井上慎一）

昨年に引き続き、2 回目の参加となりましたが、今年は、愛知万博の南アフリカのナショナルディに参加させていただき、その後、南アフリカ館見学をしたり、実際に南アフリカの方々ともお話しをしたりと、大変貴重な体験をさせていただきました。ほんの少しではありますが南アフリカという国の理解が深められたかなと感じています。（浅野光司）

「やれることから」～このﾎﾞﾗﾝﾃｨｱに関わる前は「何故南アフリカ？」「本より送るべきものがあるのでは？」等、頭で考えてばかりで手を動かすことをしていませんでした。この機会を与えてくれた遠い国で頑張っている彼等の笑顔に感謝しています。（高清由美子）

～南アフリカ訪問記～

近藤 信幸

2005 年 8 月 14 日から 22 日にかけて南アフリカを訪問した。TAAA に関わる者として直接南アに触れてみたいという思いがやっと実現した。野田さんや蓮沼さんに無理を言って段取りを調整してもらい、南アの小中学校や NGO 訪問、教育関係者や教育大臣面談、果ては喜望峰やペンギン観光などこれ以上ないほど充実した旅程が組まれた。ここでは特に印象に残ったことをつづりたいと思う。詳細はブログに載せてあるのでそちらを参照していただきたい。

ゴルフ場とタウンシップ

初日はヨハネスブルグ近郊の小学校を３校訪問した。黒人居住区は失業率が７～８割で町では多くの人が所在無くたむろしていた。いずれの学校でも歌やダンスで大歓してくれた。子どもたちはほんとに元気でいつも笑顔で迎えてくれる。私はそれに感激したが、一歩外では厳しい現実の世界がある。その大人たちは彼らの親たちである。そのギャップにいささか戸惑いを隠せないのであった。プレトリアの教育図書館を訪れた帰り、ハイウェイ沿いに大きなタウンシップが現れた。いずれもトタンで作られた簡素な建物である。あたりから煙が漂っている。薪で夕餉の支度をしているのであろう。そこから川ひとつ隔てたところにあるゴルフ場に案内してもらった。中では白人のグループがパーティーをしていて楽しそうだった。ゴルフコンペでもしていたのだろう。緑々とした芝生をゆっくりと歩き、川のせせらぎを聞きながらセレブな気分を味わった。川を渡ったところに突如大きな豪邸が現れたが、中には誰も暮らしている様子はなかった。別荘のようだ。川ひとつ隔てただけの距離にタウンシップとゴルフ場が並存している。「Welcome to South Africa!　これが南アの現実だよ。」蓮沼さんの声がこだました。あたりにはキャンプからの煙がかすかに漂っていた。

ゴルフ場の豪邸と子どもたちの家

VREDENDAL 訪問

西ケープ州北部にある VREDENDAL という町を訪れた。ケープタウンからは５００キロ離れた田舎である。ナマクワランドに近いこの地域ではあたりに黄色、白、紫の花が延々と咲き乱れている。広大なブドウ畑が地平線にまで広がっている。これらは

すべて白人所有の畑である。山の上にある小学校を訪れた。途中いたるところで暇そうにしている人びとを見かけた。あまり覇気がない。このあたりの仕事は主にブドウ農園での刈入れなどで年に 3 か月くらいしかない。やることない大人たちはアル中になる人もおおい。給料をワインでもらったりもするらしい。アル中になっている少年もいるというから驚きだ。小学校にはコイ族やサン族の子供が多くいた。みな大歓迎してくれた。学校の回りは広大な大地が広がる。真っ青な空の下、遠くに小さな住居が無数に見える。子供たちはこういうところに住んでいる。卒業後はどうするのだろう。ずっとこの疑問があったが、訊いてみると経済的な理由でここから上の学校に上がっていく人は 1 人もいないという。せっかく勉強が出来ても、中学高校大学、そして社会的に主体的な存在になっていくという道がなければ勉強する目的を見出せるのだろうか。読書し勉強することは絶対に必要なことではあるがそれだけですべてが解決されるわけではないということがよく分かった。

最後に

南アを訪れて、西欧式の白人社会に南ア黒人が適応できるかが大きなテーマになっているということを実感した。ただそれは調和ではなく、前者への吸収である気がしてならない。特に経済分野ではそうであろう。この流れはきっと止められない。であるならばその流れの中で競争し勝っていけるようにすることが教育の使命ということになろう。確かにあばら家に住み、満足な教育も医療も受けられない人たちは、経済的自立を目指さなくてはいけない。戦後日本もそうだったように。ただ理屈ではそうなるのかもしれないが、なにか得体の知れない違和感をも抱かずにはいられないのである。この違和感はなんだろうか。それはきっと、そうすることが一番いいことだということを強制し、無批判に受け入れられてしまうことに対する違和感なんだと思う。その過程で失われてしまうものもたくさんあるだろう。このニュアンスがなかなか表現できないのだが。

上：歓迎のダンス　ベノニ
下：カエリチャの学校で　右後ろ 近藤

今回出会った多くの子供たちは将来なにを夢見ているのだろうか。大学を出て政治家や役人になるのもいいし、企業でビジネスマンとなって裕福になるのもいい。農業をやってワインを造ったり、学校の先生になったっていい。いずれにしろ、自分の人生を自分の意志と努力で切り開いていける思考力と環境を創っていってほしいと強く願うのである。

南ア訪問日記　２００５年８月１４日～２２日　　野田 千香子

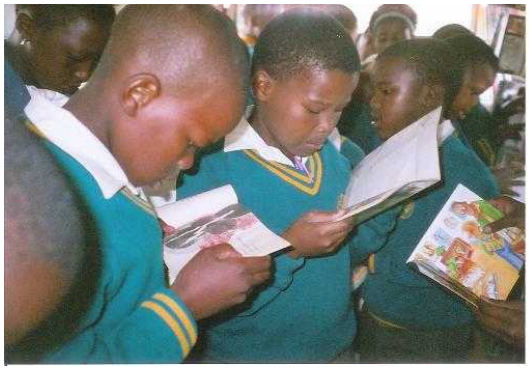
8月14日(日) 成田発

8月15日(月) TAAA 会員の近藤信幸さんとヨハネス着。蓮沼忠さんと会う。以後三人で行動。
数台の移動図書館車のベース、プレトリア教育図書館を訪ねる。モナ館長らとミーティング。運行状況もよく巡回学校数の拡大に努力している事がわかる。プレトリアから遠い地域には新たなベースをおいて、台数も5～6台増やす必要があることもわかった。
午後、移動図書館プロジェクトに協力的な弁護士事務所を訪ねる。
毎日新聞南ア支局長白戸氏、大使館調査官井ノ口氏、ウイッツ大学院生で TAAA の日名さんと夕食。白戸氏から、黒人の厳しい生活状況や犯罪の起きやすい状況について話を聞いた。

8月16日(火) ベノニの MEI のバスに同乗、**学校訪問(写真左)**。数年前に肺がんを治療しながら、システム作りの仕事を成し遂げた故マーガレット・グレイヤーさんの功績は、アリソンさんにしっかり受け継がれている。ここが今後、全国のモデルケースになる。
午後、南アの大きな教育 NGO、READ を訪問。レプリカとは言え、美術品に囲まれた広いスペースで一流企業のようなイメージ。こういう NGO も南アにはあるのだ。JVC 津山直子さんと夕食。

8月17日(水) ハウテン州教育省にて、マルチメディア部長ブシ・ドラミニ氏と面会。NGO である MEI への協力を依頼。快諾を得る。MEI の長年にわたる宿願が解決に向かいそう。
その後、ソエトの端のまずしい新興地区の移動図書館巡回学校を訪ねる。住民の40%は外国人。やさしい**モケチ校長先生(写真右)**は子どもの親の居住権の心配までしていた。失業率80%。貧しいこの地区は教材も不足している。移動図書館の巡回を心から感謝された。
午後、プレトリアにて、パンドール教育大臣と会議。大臣は学校図書の新綱領を作成し、その中に移動図書館を盛り込む、と明言。これによって移動図書館の全国展開に拍車がかかるだろう。
夕方、国内航空でケープタウンに移動。

8月18日(木) 西ケープ州教育省、教育図書館を訪問。ここが今後のカエリチャなどの移動図書館のベースとなる。百冊ずつ州内の全クラスに本を配布した、と聞く。数校を回ってみると確かに百冊ずつ置かれていた。西ケープ州は他州と比べて、図書への取り組みが進んでいるとも言える。ケー



プタウンから500キロのブレデンダールへ数年前に送った移動図書館車の運行状況が遅れていることについて、州教育省からの援助を依頼した。これも功を奏しそうである。
西ケープ州の1台目と2台目が運行している山村のズアールとエルギン(昨年訪問)では、移動図書館が来てから子どもたちのテストの点数が上がってきていると、聞いた時は、とても嬉しかった。
次回に送る車の運行地域であるカエリチャの学校と家庭を訪問する。白人を中心とした屋敷町と華やかな観光地とは打って変わって、空港からケープへの途中には低い小屋が波のように続く地域がある。このひとつがカエリチャである。
夜遅く、500キロ離れたブレデンダールに到着。運転はすべて蓮沼さん。
8月19日(金) ブレデンダールの巡回学校を訪ねる。都市と数100キロ隔絶したぶどうとワインの大農園で年数か月仕事につく季節労働者が子どもたちの親である。アパルトヘイトが終わってもここの生活は変わらない。アフリカーンス語を話すこの土地の人たちが外へ出ても仕事がない。先生も優秀な子が上の学校へ行ける条件がないことに絶望感を抱いている。移動図書館車がこうした土地でひとときでも子どもたちが読書によって充実した時間を持てることに寄与できること、今はそれだけで良しとしなければならないのだろうか。解決しなければならない問題はあまりに多く、その州、その地域によって多様である。元 ANC 東京事務所マツイーラ氏の子息カテレホと夕食。
8月20日(土) 9回目の南ア訪問で初めてテーブルマウンテンからカエリチャを俯瞰した。
8月21日(日) 南アより日本へ。22日近藤さんと私は成田着。蓮沼さんはヨハネスに残る。

移動図書館車、輸出入の変遷　　浅見 克則

黒人政権に移行した後、未だ政府組織がしっかり機能していない時期に移動図書館車第一号を送った。輸入税減免申請も毎日新聞の福井記者に作ってもらった自己流雛形にDATA を入れ替えるだけの簡単な申請書。政府部内には仕事に慣熟した白人が多く残っていたが申請の毎に変わる猫の目フォームに現地 NGO は大分苦戦を強いられた。盗難車をチェックするためのエンジン番号の登録等は日本では考えられないことであった。が、日本サイドは抹消登録証と整備記録簿、それに南ア側から送られてきた輸入許可番号を添付すれば後は輸出業者が自動的に処理してくれた。

時が移り南ア側はフォームが定まり、又 10 年以上の中古車の原則禁止等の法整備が進んできた。それに反して日本サイドでは盗難車の不正輸出を防ぐために廃車する時点で輸出仮申請をし、陸運局の用途廃止から国土交通省への輸出申請までの申請人の一致を確認するために新たな法律が施行された。(それだけ盗難車が増えたと言うことか？)継続検査では何とエンジン番号のチェックまで始めた。

前進しつつある国と停滞し始めた国の違いがこんなところにもジワっと滲み出始めたかとちょっと寂しい。

いずれにせよ今回は蓮沼さんが輸入税減免許可取得に南アで奔走した。今度は国内でも輸出確認の為の仕事がドサっと増えた。(・・・・ため息)

「ホワイトバンドデー」に参加して

久我　祐子

「3秒に1人子供が貧困で死んでいる。この状況を変えるにはお金だけでなく、ほっておけない、という意思表示が必要。その意思表示にホワイトバンドをつけよう」という趣旨の「ほっとけない世界のまずしさ」キャンペーンのイベントが9月10日に芝公園で行われました。

TAAAがこのキャンペーンの賛同団体になったこともあり、私はTAAA代表の野田さんと一緒に参加しました。事前の宣伝やイベントの説明も不十分な中、道案内もなく迷いながらたどり着いたイベント会場には、いくつかのNGOブースやフェアートレードの出店が点在し、コンサート屋台からは耳をつんざくようなバンドのパフォーマンスがひっきりなしに聞こえてきました。多数の学生らしいボランティアさんが、ホワイトバンドやTシャツの販売、参加者の誘導、様々な雑用を少々不手際ながらも熱心に楽しそうにこなしていました。イベントの全体の雰囲気から伝わる学生のサークル的なノリに、ほほえましいものや正直物足りないものも感じるイベントでした。

しかし、お祭り的な物足りなさを補って余りある「可能性の芽」もしっかりと感じ取りました。ボランティアさんを含め集まった人達は、参加すること、そしてホワイトバンドをつけることがが「きっかけ」になって、世界の暗部を意識して目を向けていく可能性があるのです。人によってその「きっかけ」は、人生の進路を大きく変えるものかもしれません。ホワイトデーに参加したことが「きっかけ」で、JVCのボランティアを名乗り出た方も4，5人いると聞いています。グローバル化の大きなうねりが生み出している、世界（先進国も含めて）の貧困や経済格差という暗部のグローバル化に目を向けるきっかけ作りは、いくらあってもいいと思います。世界規模で人々にそんなきっかけを与えている「ほっとけないキャンペーン」に対し、一部の日本のマスコミは批判材料を探すなど意地の悪い見方をしていますが、日本内部でも広がっている貧困や格差を指摘しているマスコミは、このキャンペーンに対し暖かい目を向けて応援していって欲しいと思います。

ＴＡＡＡは「ほっとけない世界のまずしさ」キャンペーンの賛同団体のひとつになりました。写真はホームページ www.hottokenai.jp より。ＴＡＡＡのホームページ http://www.taaa.jp/からも見る事ができます。

◆主な活動（2005 年 5 月 20 日～2005 年 9 月 19 日）　*下線は南アにおける活動*

5/21 会議　蓮沼忠　浅見克則　西村裕子　安部弥生　近藤信幸　野田千香子
5/21 2004 年度会計表作成　安部
5/22 アフリカンフェスタ(日比谷公園)AJF に参加　久我祐子　野田
5/23～30 KZN 州イナンダ区移動図書館訪問　武藤豊
5/24 南アヨハネスブルグへ戻る　蓮沼
5/24 ダビンチ募金“イーココロ”に登録　関根章博
5/26 学校 HIV ワークショップ参加　平林薫　武藤
5/26～6/6 会報３８号編集　野田　西村　関根
5/29 JVC 南ア・ワークショップに参加　野田
5/31 ソニー・オーストラリアより英語の本収集・寄付がダーバンに到着　蓮沼
6/2～17 ハウテン州の六つの教育区長訪問　蓮沼
6/2 ンドエドエ３校訪問　武藤　平林
6/3 移動図書館巡回先マンドシ小学校へ　平林
6/11 会議　ＥＬＥＴ訪問　蓮沼　平林　武藤
6/13 ７月報告会ニュースリリース作成　丸岡晶
6/14 宇都宮市より移動図書館受領　北爪健一
6/15 ELET 訪問　代表と打ち合せ　武藤
6/18 岐阜県瑞浪市より移動図書館受領　浅見
6/19 作業と会議　安部　西村　下谷房道　関根　村泉巨竹　浅見　山下八千穂　野田
6/20 埼玉県国際交流協会に会計相談　野田
6/20 ELET にて会議　平林
6/20～22 会報発送　井出利栄
6/24 ELET 情報交換会　武藤
6/25 長野県東御市より移動図書館車受領　浅見
6/27 ELET にて会議　平林
6/28 ホームページ更新　近藤
6/29 「ケイコとマナブ」誌から取材を受ける　関根
7/3 会議　浅見　野田
7/4 南アＲＥＡＤ財団理事長と面談　蓮沼
7/3～7/9 ＪＩＣＡの委託事業　精算作業　安部
7/10 JICA 事業第Ｉ四半期報告書提出　安部
7/4 東京 JICAにて草の根事業意見交換会　安部　野田
7/11 埼玉県国際交流協会会計相談　野田　西村
7/14 ピーターマリッツバーグ教育省で会議　武藤
7/17 作業と会議　西村　浅見　安部　野田　関根　下谷　近藤
7/18～19 ウルンディとバズワナ教育事務所訪問　移動図書館打ち合わせ　武藤
7/19 会議　平林　野田
7/25 KZN 向けの寄付車両の書類準備　日名徹一　蓮沼
7/25 ELET にて重家在南ア大使と会議　平林　武藤
7/26 西ケープ州教育省と会議　蓮沼　武藤
7/25～28 西ケープ州ヴレデンダール視察　蓮沼
7/30 南アより帰国　武藤
7/31 TAAA 報告会とワークショップ　講師　平林ほか　埼玉県労働会館にて 27 人出席　懇親会　１３人
8/3 アフリカ支援連携促進ワークショップ参加　平林　野田
8/4 TAAA の HP に報告会レポート　丸岡
8/4 ジャンジャンサイトに田所誠三さんがTAAA報告会をレポート
8/7 青葉インターナショナルスクールより椅子寄付、梱包作業　浅見　西村　野田
8/9 JICA 研修センターにて講演会　平林
8/10 JICA 国際センターにて会議　平林　野田
8/10 打ち合せ会議　平林　野田　近藤　関根
8/16 南アのダーバンへ戻る　平林
8/18 鎌ヶ谷市より移動図書館受領　北爪
8/20 マンドシ小学校訪問　平林
8/14～8/22 南アを訪問（南アで蓮沼同行）野田　近藤
8/24 本と椅子と算数セット　南アへ出荷　野田
8/24 打ち合せ会議　野田　近藤
8/26 横浜中央図書館より来訪　野田
8/28 打ち合せ会議　野田　北爪　浅見　久我　西村
8/28 南ア訪問写真ブログ作成　近藤
8/29 ELET にて会議　平林
8/29 プレトリア図書館長モナ氏をＭＥＩへ　蓮沼
9/1 JICA プロジェクト・エイズデイのイベントで学校訪問　平林
9/1 JICA 事業代現地連絡業務　安部
9/5 プレトリア日本大使館と JICA 事務所訪問　平林
9/5 MEI の教育区長へＭＥＩ支援依頼　蓮沼
9/6 TAAA が「ほっとけない世界のまずしさ」キャンペーン賛同団体に承認される
9/7 ELET 農業プロジェクト記念式典　平林
9/10 「ほっとけない」イベントに参加　野田　久我
9/12 駐車場提供依頼面談　浅見　野田
9/12 Gamba ネットのゼミに参加　野田
9/14 マンドシ小学校訪問　平林
9/15 フリーステート州より図書館車運行の意向あり　蓮沼
9/15 JICA エイズ事業ンドエドエ訪問　平林